

## 第百六十話 大本営発表の虚実！

信用できない情報の代名詞としての「大本営発表」であるが、日米開戦初期は比較的正確であった。が、次第に戦果が水増しされ、我が方の損害が過小発表されてきた。その変遷を見てみると戦況が大きく影響している。終戦までに実に約900回にわたって行われた大本営発表の全体像を見てみたい。



### 1 日米英蘭開戦後の大本営発表の概要

「帝国陸海軍は本八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」との有名な大本営発表が12月8日0600に発せられ、爾来終戦までに846(or847)回を数えた。

辻田氏の資料を参考に纏めると下表の通りである。

区分	期間	月平均回数	特色
1期	1941/12～1942/4	5.6回	日本軍優勢で、内容も比較的正確
2期	1942/5～1943/1	7.6回	日本軍敗勢で、ミッドウェー、ガ島戦果誤認
3期	1943/2～1943/12	1.5回強	日本軍劣勢明白で、劣勢の隠蔽、第一線の報告鵜呑み、信頼性破綻
4期	1944/1～1944/10	1.4.2回	戦局急激悪化で、戦果の誇張、損害の隠蔽増大、正規の誤認：台湾沖航空戦
5期	1944/11～1945/8	1.8.9回	架空の戦果計上、過剰表現抑制

### 2 「転進」「玉碎」の語彙使用の変化

玉碎の語彙が初めて使用されたのはアツツ島守備部隊の戦況を伝えた1943(S18)年5月30日の発表である。以来島嶼守備部隊の玉碎が相次いだが、1944(S19)年ケゼリン、ルオット島守備部隊の戦況発表からは、「全員戦死」と表現されるようになった。一方、撤収との語彙から転進との語彙への変更は、ガ島からの撤退(1942/12)からである。この語彙も、ニューギニア戦線の戦況発表で「撤退」との語彙を使用せざるを得なくなった。美化し、表現で糊塗することは難しくなったのだろう。

### 3 トピックス

- (1) 陸海軍対立の最前線 華々しい海戦と地味な陸戦、対抗意識の増幅  
統一報道部創設するも実態は改善されず
- (2) 竹槍事件 海軍の発表内容に陸軍が異議を唱えた事件(1944/2/23 毎日新聞朝刊)
- (3) マスメディアと軍の一体化・癒着：マスメディアへの統制強化、メディア間売上の熾烈な戦い、迎合、記者を報道班員に指定し軍属と。忖度する報道
- (4) 初期には正確な報道を目指し戦果修正もあり。中味の無さを修飾語で糊塗
- (5) 過大発表と実際のギャップ  
連合軍喪失数 発表分(空母:84隻、戦艦:43隻)、実際(空母:11隻、戦艦:4隻)  
日本海軍 発表分(空母:4隻、戦艦:3隻)、実際(空母:19隻、戦艦:8隻)
- (6) 原因：戦果確認の困難性・誤認、第一線からの報告に反証出来ず・鵜呑み、統帥部内の議論決着せず・妥協の産物化、士気低下への悪影響考慮  
継戦意思・鼓舞の必要性、重ねた嘘の転換困難、被害の局限化意識

### 4 今後の課題

国民の知る権利と作戦上の要求である秘匿の必要性の節調？国会の関与は？

(第百六十話 了)